

助動詞の語形変化と活用形

—— 中世後期を中心として ——

0 はじめに——本稿の目的——

本稿では、中世後期に見られる幾つかの助動詞の語形につき、その語形の成因を、

語形を縮約させつつ無変化助動詞化しようとする動き

と、それに抵抗する

活用形の指標としての活用語尾保存の欲求

という二つのベクトルの矛盾的合一として解釈を試みる。

1 ラウの已然形ラウメ

助動詞ラウは、言うまでもなく中古の助動詞ラムの移り変わった姿であり、中世に現われ近世に入るとやがて衰滅してしまう助動詞である。しかし、中世の末期においても、ラウの使用は、抄物、キリシタン資料、虎明本狂言など、口頭語の性格の強い文献資料に広く認められ、使用頻度も高く、特に、係助詞を文中に置いた文の文末に多用される推量表現形式であることが知られている。

このラウが係助詞コソの結びとなる場合、次の例のように、ラウ

とラウメの二つの形が現われる。

《ラウ》

① 俊寛といふ文字はなかつたによつて、礼紙にこそあるらうと言つて、……（天草版平家物語 73 頁）

② 桃云……チツトラチクホイヤウナル処テ焚テコソアルラウソ（三休詩幻雲抄 第五冊 抄物大系512 頁）

③ 鮑ハ飲一也ノムトコソヨムラウイラス字ナリ（玉塵抄 第六冊 抄物大系第二巻47 頁）

《ラウメ》

④ 統翠云……今ハ面白テ聞く鳥モ今ハ面白テ見ル花モ別後ハ独コソ見ウスラウメ（三休詩幻雲抄 第三冊 抄物大系325 頁）

⑤ 史漢ノ書ニ此ノヤウニアルハハラボエヌソサモコソアルラウメソ（玉塵抄 第二七冊 抄物大系第四巻261 頁）

⑥ 許ハ賜天子書ヲ事コソアルラウメ（杜詩統翠抄 四 統抄物資料集成（一）315 頁）

もちろん、ランやラメも抄物などには見られるが、キリシタン資料での状況（エソポ物語にはラン・ラメは見られず、平家物語では

坪 井 美 樹

ランの用例6例全てが和歌中の用例である)から、ラン・ラメは、口頭語のラウに対して既に古語となっていたものと見なし、よいであろう。したがって、ここではラウと(古語のラメとは形が異なる「新しい」形)ラウメとの「ゆれ」に限って考えることとする。

右のことは、ラウメの形が口頭語として中世後期に普通に話されていたと直ちに主張するものではない。ラウメは、キリシタン資料や狂言には見られず、抄物でも限られた資料にしか出てこない。したがって、あるいは、講義調の口頭でのみ使われたか、抄物での特異な書記言語であったかもしれない。また、ラウメの見られる資料でも、いずれも(コソの結びには)ラウの形の方が使用数は優勢である。ただし、一文獻内部で、ラウの形が使われる部分とラウメが使われる部分に明確な文体上ないし位相上の差異は認められず、本稿の論旨にとっては、ラウメが実際口頭にのぼせられたものかどうかは、とりあえずどちらでもよいことである。

ところで、このラウ・ラウメの「ゆれ」は、ラウの已然形の語形の「ゆれ」というよりも、コソに対する結びが、連体終止形と已然形とで「ゆれ」ているのだと見る方が適切であろう。

コソに対する本来の已然形の結びが法則として緩んでしまっているという事実は、何もラウだけでなく他の活用語が結びとなる場合にも、中世末期においては、見られる現象である。なかでもラウは、他の語に比してコソの結びに連体終止形をとる率がとびぬけて高い。⁽²⁾

係り結びは、その構文論的本質が何であれ、形態の上からは、一文の終末が、連体形または已然形という通常とは異なる形態をとるところにその特質がある。ところが、連体終止の普遍化により、ゾ

・ナム・ヤ・カの結びたる連体形終止は、その特異性を失い、形態の上からは係り結びが見えなくなってしまう。そして中世末期に至るまでに、形態上の特質を持った係り結びは、コソ・已然形の係り結び一本に限られてしまい、なお命脈を保つというものの、その孤立化はいかんともしがたく、既に形態上の呼応を失う場合もまま見られる、といった状況となったのである。

ラウとラウメの「ゆれ」も、このコソ・已然形係り結びの「ゆれ」の一環であるから、ラウメも、次の例のように、コソではなくゾの結びに現われてみたり、係りそのものがないのに文末に現われるようなこともある。

⑦五月ノ律ノ寒ヲスルニ入ル器デソ。アルラウメ(玉塵抄 第二四冊抄物大系第五巻576頁)

⑧続翠云……只世間ノ人カ差別ヲスルテコソアレ蝶ハ九月十日トノ隔ハナイ花香ハ一夜ニハ不可衰ト思フツラウメ也、(三体詩幻雲抄 第三冊 抄物大系350頁)

さて、コソの結びが通常の終止とは違った形(已然形)をとるのが本来の係り結びである、という意味では、ラウよりもラウメがより規範的な形である、と言えるのだろうか、それでは、その語形はなぜラウメという姿をとるのであるうか。

ranu>rau>ri:

という式と、

rame>raume>ri:me

という式をならべてみても、ラウメの姿の由来を連体終止形ラウの由来と平行する単なる音韻変化の式としてはとらえられないことは明らかである。

ラウメに至る一段階前の形とも考えられるラム(シ)メの例が報告されている。

⑨ 諸人の御ために御たからにてこそ候はんずらむめ(日蓮 兩人御中書一八八八)

⑩ 後世の御ためにてこそ候らんめ(日蓮 妙心尼御前御返事)

⑪ 只アラン物トテハ望中ニ江水ノ渺々ランマデコゾアランズランメ也(三体詩絶句抄三)

《三例とも橋本進吉『助詞・助動詞の研究』に報告されたもの》
ラウメの前身として、このラム(シ)メを考えるとしても、ラム(シ)メの姿は、やはり単なる音韻変化としては解釈しきれない。

橋本博士は、

「らめ」となるべきが、「らん」が多く云はれるので二つが混同したのであらう。(『助詞・助動詞の研究』400頁)

としている。また、村上昭子氏は、

ラウメは、おそらく、ラメあるいはラムメが終止・連体形のラウにひかれて生じたのであらう。(前掲注1論文)

としている。混同(混淆)として説明するにしろ、牽引として説明するにしろ、その発生の動機は、単に連体終止形の方が多く言われるから、という量的な問題だけで済まされるものではなからう。

ラムがラウとなったのは、推量の助動詞ムがウになるのと平行して起こった出来事であらうし、そしてそれは、口頭においては、遅くとも中世に入るときに起こっていた出来事であったらう。そして、それとともに、ウ・ラウの文末への集中→形態上の固定化⇒無変化助動詞化の傾向が生じていたのだらう、と思われる。

つまり、このラウメの形は、無変化助動詞化したラウに、既に形

式化したコソゝ已然形係り結びの残存規範意識が働いて「固定化した」ラウ+(コソの結びの形態的指標)メの形をつくりあげたものと解釈できるのである。そして、このラウメを更に文章語化した形がラム(シ)メであつたらう。すなわち、ラウメは、時間的前後関係としてはラメの後身であるとしても、その形成の心理としては、一種の「誤った」回帰の結果生まれたものと見ようとするのである。

この固定化⇒無変化助動詞化したラウに付く再活用語尾とも言えるメは、助動詞ム(シ)にも見られる。「左に此島正年『国語助動詞の研究 体系と歴史』275頁に報告されている例を示す。」

⑫ 花みつ殿とわれと比ぶれば、月光(つきみつ)をこそ失はんめと思召し候ふ心中御ことわりなり(花みつ 有明堂文庫『御伽草紙』467頁 ただし、『室町時代物語大成』第十所収の「花みつ」「花みつ月みつ」にはこの本文無し。)

⑬ 侍ほどの人、料足なくば、くふまじきにてこそあらんめ。とかくわやくなり。(醒睡笑 四 角川文庫上巻173頁 ただし、静嘉堂文庫蔵本では「あらめん」とある。)

本稿の筆者は、ウ・ラウなどの助動詞の無変化助動詞化を、係り結びの衰退、已然形の消滅等により結果として連体終止形以外の形をとらなくなったものと見るのではなく、言語主体の意識(無自覚ではあるが)の上に、無変化助動詞化への志向に係り結び及び已然形の全くの消滅以前に既に芽生えていたものと見ようとするものである。

そして、語形縮約(すり減り^③)を起こす他の助動詞にも、一方、それに対する反動としての再活用化の動きがあつて、その両者のあ

つれきから、中世後期に特有な「回帰形」が生まれたと考えられる事例が、次に見るように存在するのである。

2 サウの已然形・命令形サウへ

「候」が示す多くの変化形の成立と分布は、とても簡単にとらえられるものでなく、それはそれとしての精査が必要である。ここでは、特に、中世後期キリシタン資料や抄物にかなり多く使われているサウに着目したい。

サウは「候」が語形縮約（すり減り）を起こしたものである。「すり減り」といっても、それは助動詞として頻用される語について、なるべく短い語形を造りだそうとする言語主体の無自覚的な心理によって語形が縮約されるもので、鉛筆が使用の結果短くなるような物理的なものではない。

saburan ~ samuran > > sau > so :

という変化の式を想定し、その出発点から到着点へ至るまでの間をできるだけ自然な音変化として説明し得る中間形を種々想定することとは、変化の筋道をたどる一つの方法ではあっても、変化の動因を直接説明するものではない。「すり減り」は、本来言語主体の心理に基盤を置くもので、實際上語形の縮約へと至る音の脱落・変化は、いわば質的な変化として「一挙に」起こると考えた方がよろしからう。

さて、このサウにはサウへ（第三音節は発音としても *so* であつたかもしれない、と言われる）という活用形が存在する。

《已然形の例》

⑭……母サニ我カ一騎マテ金陵ヲ発ゾ京エコソ上リサウヘト寄別

朱——（拾遺）二也（三体詩幻雲抄 第二冊 抄物大系225頁）
《命令形の例》

⑮トウヲカヘリ（お帰り）サウヘト云テ……（四河入海 一ノ三七才）

サウの使われ方を見るに、未然形・連用形として使われる（ただし語形変化しない）場合もあるが、サウラウに比して言うと、文末に連体終止形として使われることが一番多いようである。

⑯ケウアル上郎ノサフ。チツト御出アツテ。御遊サフラヘト云タソ。（三体詩素隠抄 卷三 抄物大系上322頁）

⑰アマリ御恩ガ。アツサニ母ノ見ノ参申サセラレテ。サフラフニ。何トテ不令ノ婢ナントシテ。淫一佚之詞ヲバ。ウケタマワリサフソ。（同 卷三 抄物大系上321頁）

右の例のようにサウラウとともに使われる時、文末の終止にはサウ、文中や文末でも命令表現などの時にはサウラウが使われることが多いようである。

史記桃源抄は、サウの多用される資料であるが、ここでもサウは文末終止に用いられることが最も多い。

サウラウのすり減った形サウは、それ自体種々の接続形式であることを形態的に示す活用語尾を失っており、いわば無変化助動詞化への道へ一歩踏みこんだものである。しかし、他の助詞・助動詞をとらなっている一定の表現形式となる場合（たとえば、サウズ・サウなど）は良いが、命令形のように、それ自身の活用語尾の形態によって、単なる終止とは違う命令表現形式であることを示す必要がある場合には、いわばやむを得ぬ再活用語尾として、命令形の指標たるへがサウにくっついて示されたのである。

史記桃源抄の中にサウがその形のままに命令形として使われていると思われる例があるが、それは次のような例である。

⑮ スツト無_レ露、ヨマイリ_レサウト云ソ。(史記桃源抄 游俠列伝 一六 二一オ)

この抄文だけでは命令形であるか単なる連体終止であるか見分けがつかない。前後の文脈から、これは酒を人に勧めている言葉であることがわかるのである。すなわち、サウだけで命令表現に使われる場合もあったのであろう。そして、これは、サウが、サウラウに比すれば、活用語尾の部分をすり減らした形である以上、当然生じ得る事態であった。しかし、これでは、やはり、命令の意図はプロミネンスやイントネーションの上に表現されたにしても不便であって、特に書記言語では、意味伝達の上で混乱が生じ得るものであった。そのために、これもまた、一種の回帰として命令形の指標たる「ヘ」が、すり減ったサウに付いて、サウへの形で使われるようになったものではなからうか。

なお、このような語形変化を荷う活用語尾を失ったサウが、打消しのズ・ヌに続く時は、直接的にサウズ・サウヌの形で接続したが、推量の助動詞ウ・ウズ・ラウなどは続きにくく、他の異形(サウラウなどの非縮約形)に任せるか、あるいは唯一(サウ+ウズ)サウズといった形が存在した。この推量表現におけるぎくしゃくした関係が、サウラウの接続にまで及んで一種の誤った回帰形を生んだとおぼしき例が、次のように玉塵抄に見られる。⁽⁵⁾

⑯ ナニトノ吾カ——心性ヲ見_レ得スル_レヲ得サウラウワウゾ (玉塵抄 第十七冊 抄物大系第四卷246頁)

語形縮約(すり減り)の問題として見ると、「候」の変化形(あ

るいは異形)群には他にも興味ある問題が多いが、それら全部の成立と分布については、稿を改めて考えてみることにしたい。

3 マイ_レマジイ・ベイ_レベシイ

マイ_レマジイ・ベイ_レベシイとそれぞれに「ゆれ」を示す二つの助動詞について考える。

マイ_レマジイは、次の例からもうかがえるように、
⑳ 今の都福原へのぼらうずるに三日には過ぎまじい。院宣をうかがはうずるに一日の逗留があらうず。都合その間七八日には過ぎまい(天草版平家物語 卷二第九 146頁)

用法の上での顕著な差は認めがたい。それに対して、ベイ_レベシイの方は、ベシイが、

㉑ 真トニ山ノ居_レ所ト云ツヘシイ体ソ。(三体詩素隠抄 卷四 抄物大系上423頁)

のように、必ずツベシイの形で用いられるのであり、ベイの用法と全体が共通するわけではない。

このマイ_レマジイ・ベイ_レベシイの「ゆれ」については、両者を積極的に関連させて、

「マイはベイに類推してできた形
ベシイはマジイに類推してできた形

とする説がある(大塚光信「助動詞マイの成立について」昭37『国語学』50集)。マイやベシイの成立を単なる「自然な」音変化とは見ない卓説であるが、しかし、この説でも次のような点は充分説明できない。

(1) 二つの語が互いに相手への類推形を生み、それが語形の「ゆれ」

として共存するということがどれほどの概然性を持つか。

(2) ベシイの形がツベシイに限られること。

(1) についてももう少し言葉をつけ加えれば、「類推」が働く場合、類推によって他の語を自らの姿・体系に引き寄せる側と、引き寄せられる側との間には何らかの力の強弱関係があつてしかるべきであろうと考えるのである。両者が対等に互いを引きつけあうところに二種類のそれぞれの類推形が成立するものであろうか？

そこでもう一度、このベイとマジイとの両者の関係を御破算にして、本稿の立場から考えてみたい。

助動詞が助動詞たらんとする限り、語形縮約(すり減り)への志向を本来的に持つものと考えるところ(ということとは、助動詞の語形縮約が必ずしも「自然な」音変化である必要はないことを含意する)、マジイが三拍のその語形を更に二拍の長さにすり減らすとしたら、あり得る形はマジかマイしかない。前者は「ジイ」という口頭においては長音として発音されたであろう部分を短音化したもの、後者は語頭と語尾を保持して語中をすり減らしたもの。語頭のマを脱落させるような形はちょっと考えられない。語形縮約は新語形の創造であり旧語形からの離反であるが、同時にそれは旧語形との連想を断ち切るほどの飛躍は避けられるのが通例であるから。そして、そのような事情(マジイの短音化)でできたと思われるマジが実際に使われることもあったのである。次の例、連体法であることに注意。

②ただ人には馴れまじ物ぢや、なれての後に、はなるゝるるるるるるが、大事ぢやる物。(閑吟集119 岩波古典文学大系『中世近世歌謡集』163頁)

大塚光信氏は前掲論文中で、このマジを「マイからの逆類推によってあらたにつくられた新文語形だったのではないか」とされておられる。これも有り得るが、ただし、天草版平家物語では会話文中にこの連体用法のマジも三例現われているのである。

③人づてに申すまじことぢやと言ふによつて、……(天草版平家物語 巻一第三 21頁)

《もっとも、右の例を含めて三例全て平清盛の言葉であり、そのことに何か意味があるかどうかはわからない。》

しかし、このマジは、終止法としては古い語形のマジと同じであり、新しい形として選ばれたのは、結局マイの形であった。そして、このマイの形は、意義的に対になりやすいベイの語形ともよく釣り合う形であった。

一方、ツベシイの形はなぜ生まれたか、ということであるが、この理由は、ベシイの形の成立を説明すると同時に、それがなぜツベシイの形にのみ限られたのかを説明できるものでなくてはならない。ベシイが他ならぬツベシイの形にしか現われないことは、やはり、ツベシまたはツベイが熟合していて、単なるベシまたはベイと異なる形式である、という心理が働いていたのであろう。しかし、湯沢博士が言う

文語の「ツベシ」が慣用的語句として久しく耳に熟して居つた為、……(『室町時代言語の研究』211頁)

という点も、文献上確認できず、ただちに前提とすることはできないのだが。

ツベシイは、ツベシまたはツベイが一語として熟合したために、普通のベシまたはベイとの「異化」への志向が生まれてできたもの

ではなからうか。中世後期においてベイは、連用形ベウ (beu)・連体終止形ベイ (bei) という活用を示しているのだが、ツベイの方は、単なる「ツ+ベイ」の二語の接続ではなく一語として熟合していることを形の上で示すために、「ツベ」の部分を経幹として固定化する道をとる場合もあったのであろう。そして、それとともに、連用形・連体終止形の活用語尾をも保障するために「うれしい、やさしい、たのしい……」のような○○しい型の形容詞型活用への類推が働いてツベシイという語形を作りあげたのではなからうか。しかし、やはり、この語形は、縮約(すり減り)へと向かう他の助動詞の中にあつては逆行する異端児であり、それゆえに、結局、ツベイとの「ゆれ」の中でツベイを圧倒することができず、近世に入ると消え去ってしまう、そういう運命にあつたものと言えよう。

4 ウズとウズル

中世から近世にかけて終止法・連体法それぞれにウズとウズルの両語形の用例が見られ、しかも、時期的に異なる文献資料によって複雑な消長を示している。

その両語形の消長の実態とそれに対する解釈については、大塚光信・山内洋一郎両氏に論がある(大塚光信「ウズとウズル」昭31『国語国文』以下、大塚論文④と略称。山内洋一郎「助動詞『うず』について——連体形終止の異例として——」昭38『広島大学文学部紀要』以下、山内論文と略称。大塚光信「抄物とその助動詞三つ」昭41『国語国文』以下、大塚論文⑤と略称)。

ここでは、語形縮約への志向と、活用形の指標としての活用語尾

保存の欲求との相矛盾する力の相剋として、ウズ・ウズル両形の消長に解釈を下してみたい。

第一に、院政・鎌倉時代に、連体形ムズルが終止法にも立つ傾向、つまり他の一般の活用語と軌を一にする連体終止形成立の傾向を示しながら、室町中期の口語資料(抄物)では終止法・連体法ともにウズの語形が優勢である事実は、どう解釈できるだろうか。

大塚論文④では「旧終止形が旧連体形を包摂した、当時としては唯一の例外であること」の指摘があるのみで、なぜ例外となつたかの解釈は示されていない。山内論文では終止法のウズは旧終止形終止の残存であり、連体法のウズは抄物の文体上の特質であり口語一般の姿の反映ではない、とする。しかし、この解釈では、なぜウズだけに旧終止形が残存し得たのか説明できないし、また、連体法のウズのみを文体の問題として処理することにも今一つ納得が行き難い。

これは、やはり、終止法・連体法ともにウズという同一の語形をとることによって、ウズはウズなりに終止形連体形同化という活用語全般にわたる歴史的流れを成就していると考えた方がよいのではないだろうか。ただ、その新しい連体終止形の形がウズという旧終止形と同じ形をとつたのは、一方にウズのより一層の助動詞化への志向があつて、「むとす」という語源から離れて語形を縮約させることとなり、それがサ変の活用と手を切る形でウズとしていったん落ち着いたといふことなのではないだろうか。それが結果的に旧終止形と同じになることについては、現代の(いわば文法的知識を持ちすぎた)我々が考えるほど抵抗があつたわけではなからう。数多い四段活用型の活用語は本来終止形連体形同形なのであるから、今

述べたようにサ変であることの意識が切れる限りにおいて、唯一の例外としての異和感は少なかったであろう。

第二に、室町中期の抄物でウズが優勢であったものが、室町後期のキリシタン資料では、終止法でウズ・ウズル両形があり、連体法でウズルが優勢となる事実はどう解釈できるだろうか。

大塚論文④では「連体用法のウズル化は、ウズのためにおかされていたウズル本来の機能の回復」であるとされる。山内論文では、ウズの語形は、連体法のウズルのル音が脱落し、これが「連体形終止の一般的傾向によって」終止法にも現われたものであり、連体法にウズルの語形が見られるのは「一旦ウズとなったのが復活したのか、語脈の違いで原形が保持されたかは明らかでない。」とされる。大塚論文④では、山内論文に対して、山内論文によれば、まず、終止法・連体法ともにウズルとウズが共存し、キリシタン資料の時代には終止法ウズ・連体法ウズルが勝ち残ったこととなるが、そのような流れが不自然であること、また、江戸期に入ると再びウズが優勢になることもうまく説明できない、と批判した後、「基本的には終止用法・連体用法ともにウズであった」とし、「その当時の口語の実際には、ウズにせよウズルにせよ、連体用法はそれほど普通につかわれるものではなかった」と考え、「キリシタン物における連体用法のウズルは、当時の口語ではあまりつかわれなかった連体用法の口語文中での多用」であったとする。大塚論文④によると、結局、今度はキリシタン資料が口頭語の実際とは違った特殊な姿をとっていることになるわけである。

文献資料に現われる様相と実際の口頭語との距離は容易に測りたがいが、本稿の基本的考え方からは、このようなウズル形の優勢化

は次のように考えられるのではなからうか。

まず、終止連体形ウズが語形縮約の志向の現われとして成立したが、これに他の助動詞の場合と同じように反動として、活用形の指標としての活用語尾保存の欲求が働いたということ。そしてウズの場合、この二つの力が時間的な段階を置いて働いたのである。反動の結果ウズルの形になったのには次の二つの理由が考えられる。

一つは、ウズの第一拍のウが、それが接続する活用語の語末母音と融合して長音化し、

〔四段・ナ変・ラ変・形容詞型活用〕に接続する場合〕

— a + uzu > — auzu > — ɔ: zu

〔上二段・上一段型活用〕に接続する場合〕

— i + uzu > — i: zu > — i: zu

〔下二段・下一段・サ変型活用〕に接続する場合〕

— e + uzu > — eu zu > — io: zu

〔カ変に接続する場合〕

— o + uzu > — ou zu > — ɔ: zu

となるに従って、二拍助動詞としての語形がいまいちになってきたのであろう。同じ意志・推量の助動詞ウの場合、これは全く長音拍にまで自らの姿を薄れさせ、いわば用言の活用語尾の一形と化し去ることによってかえって命脈を保った。また、ラウやベイは、第一拍を保持することによって接続する語との境界を画した。ところがウズの場合は、第一拍と用言語尾との境界がいまいちになった結果ウズは終助詞的な立場にまで追いこまれそうになった。これに対して特に連体法の場合に活用語尾保存の反動が起り、(ウ)ズルという旧来の連体形を復活させることとなったのである。

二つは、やはり、助動詞化が不徹底であり、当初からウズルを完全に駆逐できたわけではなく、しかも、連体法のウズが生まれた後も、已然形はウズレであって、サ変からの手切れが不徹底であったこと。従って、この面からも、再活用化に際して「靡」のルが付加される形をとるのが自然であったのである。

右のように考えることによって、ウズルが一種の回帰形であり、古い形と同じ形として意識されもしたのであるから、終止法に使用される場合には、莊重態的なニュアンスを帯びることが多い(山内論文)ということも首肯できるところであり、やはり一方、結局は助動詞ウに駆逐されて、一部方言に終助詞的な(ン)ズとして残る以外になかったこともウズの運命として当然のことであったと言えるうか。

以上、助動詞の語形縮約、そして無変化助動詞化への志向と、それに対する再活用化への反動、という相反する二つの動因を根底に仮説としてすえ、中世後期を中心に幾つかの助動詞が示す様々な語形とその相互の間の「ゆれ」の解釈を試みた。

- (1) 村上昭子「助動詞ラウ——中世末期の用法——」昭54『中田祝夫博士功績記念国語学論集』勉誠社。
- (2) 湯沢幸吉郎『室町時代言語の研究』、村上昭子前掲論文参照。
- (3) 「すり減り」という語は、小松英雄『日本語の世界7 日本語の音韻』昭56中央公論社による。
- (4) 史記桃源抄の中、列伝部の抄文に現われる用例数を下表に示す。

未然形	連用形	文未終止	連体法	已然形	命令形
サウ(サフ)	サウ(サフ)	サウ(サフ)	サウ(サフ)	サウヘ	サウ
30	6	95	36	4	3
サウラフ	サウラウ	サウラウ	サウラヘ	サウラヘ	サウヘ
4	0	1	1	1	1

(6) 坪井美樹「国立国会図書館蔵本『玉塵抄』における「候」の諸形」昭59千葉大学教育学部研究紀要に既報告。

山内論文では、旧終止形残存のウズと、連体形ウズルのルが脱落してできたウズが連体終止形として連体法にもなったウズとを区別しているが、この両者のウズが、文献資料としてはどの資料から交替して現われるのか、いささか判然としない印象を受ける。抄物の終止法ウズについては、「終止法であるから、終止形のウズであることは何と説明がつく。」との文言から、旧終止形の残存と見ておられるものと解釈した。

純粹な終止用法ではウズ、ト・ナドにうけられる終止用法ではウズルが優勢であるという(大塚論文④・山内論文)。

(千葉大学教育学部助教授)